



黒船で日本に来たペリーは、どうやって日本人と話したの

オランダ語の通訳が両方にいた

ペリーがやって来たころ、浦賀にあった奉行所は、東京湾に出入りする船を調べる役目を、もっていました。ペリーの艦隊が現れて、浦賀の沖合いにいきりを下ろすと、まもなく、与力の中島三郎助と、オランダ通詞(通訳)の堀達之助が乗った奉行所の船が、近づいて来ました。ペリーが乗っているサスケハナ号のそばまで来ると、堀が下から大声で、「自分はオランダ語が話せる」と、英語で呼びかけました。そこで、ペリー側は、オランダ語通訳のポートマンを出して、堀とオランダ語で会話をさせ、堀・中島のふたりを乗船させました。このあと行われた話し合い以後、日本側とペリー側の話し合いは、日本語 オランダ語 英語、または、その逆、という順序で、訳されました。

江戸時代の日本に、オランダ語を話せる人々がいた

江戸幕府が鎖国を始めると、長崎の出島にオランダ商館が置かれ、オランダ通詞が通訳を行いました。そして、出島から、オランダの医学・天文学などの学問(蘭学)が、日本に入ってきました。幕府も、蘭学者を集めて、オランダ語の書物を、日本語に訳させたりしました。そのため、ペリー側と話すときに、オランダ語を利用できたわけです。

英語の文書を訳すときは、中国語も利用された

その6日後に、久里浜で、日本側代表の浦賀奉行にわたされた、アメリカ大統領の手紙には、ペリーに同行した中国語通訳のウィリアムスによって、漢文(中国語)に訳されたものも、付けられました。江戸幕府では、漢文を日本語に訳したものをもとにして、いろいろな人の意見を、集めました。翌年に結ばれた、日米和親条約には、日本語・英語・オランダ語・漢文の4種類の文書が、用意されました。(監修・田代 脩)

